

「レンブラントの世紀」の服飾

廣瀬 尚美, 池田 由紀子

（武庫川女子大学家政学部被服学科）

On Costumes of “Century of Rembrandt”

Naomi Hirose and Ikeda Yukiko

*Department of Textiles and Clothing Sciences, Faculty of Economics,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

On Costumes of “Century of Rembrandt”

After the independence of Northern Netherland from Spanish colony, Republic of Holland was built at the beginning of 17th Century.

The Civil Culture was created by common citizens of Holland at this period, and prevailed its influence to the whole European countries.

This Civil Culture was characteristic and quite different from the beauty of mannerism of Renaissance of 16th Century and the style of Baroque of Louis 14th era. First feature of this Culture was that the commonplace of daily life was respected and was free from the authorities of religion and politics. Many Dutch painters of this period, described vividly the daily life of common citizens.

As this period coincided with the time of activities of Master Rembrandt, it is called “Century of Rembrandt”.

We studied the costumes of citizens of that period through the masterpieces of paintings.

諸言

17世紀の初め、北部ネーデルラントは当時のイスパニアから独立して、オランダ共和国を形成した。そして瞬く間に、ヨーロッパにおける強国、即ち商業大国となり、また文化面においても独自の国民性豊かな文化を作り上げ、ヨーロッパ全域に影響を与える程に発展させたが、これは文化の発生、発展、流行の過程としては非常に特異な現象であった。この文化の最盛期は、画家レンブラントの活躍した時期と重なることから、[レンブラントの世紀]と呼ばれている。またこの文化は「市民風の文化」とも呼ばれ、16世紀のスペインを中心とする荘重華麗な宮廷文化に対して、庶民的な「軽快さ」を特徴とする一つの様式美を作り出した。この軽快さは服飾分野にも取り入れられて活動的な衣服が生まれ、ヨーロッパの他の国々に於いても広く着用されたのである。

レンブラント(1606–1669)をはじめ、ヴァンダイク(1599–1641)、フランス・ハルス(1581–1666)、ルーベン(1577–1640)、フェルメール(1632–1675)など当時のオランダ画家は、この市民風文化の特徴をよく彼等の作品に表現している。彼等はごく身近な日常的な事物を題材として取り上げ、人物画には一般市民を忠実に表現した(写真1)。従来の人物画は宮廷貴族の肖像画か、またはキリストや聖母を描いた宗教画が主であったのに対して、彼等の作品には庶民が絵画の主人公として描かれ、しかも多くは群像として生活の場の姿がそのまま表現されたのである(写真2)。



Photo 1. ハルス 旅籠にいる若者と女の肖像
1623年
Hals Young people at inn



Photo 2. ハルス 聖アドリアンヌ市警備隊の士官
の宴会 1627年
Hals St. Adriaannes City Garrison Officer
at banquet

これは近世以来の絵画が、記念碑的、非日常的なものであったのに対してオランダ絵画は作爲的な性格を排除し、日常生活の中の一瞬を捉えたスナップ写真的性格を持っていたと考えられる。従ってそこに描かれた人物の服飾は写実的であり、その画面から当時の人々の日常生活の様子を読み取ることができるのである。

「軽快さ」を様式美とした17世紀初期の市民風服飾を当時のオランダ絵画から探求するとともに、その市民文化を育んだ当時のオランダ社会の時代背景並びに、その文化がどのようなものであり、また何故オランダがヨーロッパの文化的中心地と成り得たかを考察してみたい。

オランダ市民風文化の背景

17世紀初期に「オランダ市民風」の文化が発達した要因を当時の社会的背景に探ってみると、先ず最初に挙げられることは、国家構造が中世的都市体制のままであったことである。即ち中央集権的な大権力は育たず、独立小自治体の形をとっていたため、経済的にも分立体制が温存され、そのため州単位の規則は固持するが、祖国という観念は希薄であった。自治体の中では古い慣習、古い伝統、古い特権が保持されたが、それらが集権化されることはなく、思想的には中世的自由が保れていた。これは当時のオランダに移民が多かったことも原因の一つと考えられる。オランダは移民に対して寛大であったため、スペインによる占領や宗教弾圧を避けて、16世紀末からフランドル地方の大商人、毛織物業者、金融業者が北ネーデルラントに移り住むようになった。またドイツのカトリック教徒や新教徒も宗教上の迫害を逃れて移住し、スペイン、ポルトガルからもユダヤ人が移民としてアムステルダム周辺に住み着いた。これらの移民はオランダの産業発展に大いに貢献することになるのである。

市民風文化発達の第二の要因は、オランダの商業の繁栄である。オランダはドーヴェー海峡を挟んでイギリスに相対し、フランス、北ドイツに接近し、また大河からの分流や堀割りを利用した小舟による内陸航路の発達など地理的条件を生かして、既に2〜3世紀頃からバルト海、ノルウェーへの海上輸送が発達しており、中世末期からはフランス、スペインへの航行も盛んになり、16世紀になると東インド、ペルシャへの航行も始まった。このようにして既に、15世紀にはネーデルラント（フランドルとオランダ）はイタリアと肩を並べるほど、経

済的にも文化的にもヨーロッパの先進地域であった。さらに独立後は貿易を主としてオランダは商業大国として発展していくことになるが、このように独走的な発展をオランダに許した背景には、16世紀から17世紀初めにかけてのヨーロッパ諸国の情勢が幸いしていた。当時、各国は危機的状況にあったため、経済的には消極的な沈黙状態を保たざるを得ない状態にあった。即ちドイツは30年戦争で疲弊しており、フランスは宗教戦争に加えてアンリ四世は国境周辺でハプスブルグの武力撃退に全力を尽くしており、イギリスはエリザベス一世が戦闘に精力を傾けており、スペインは北部ネーデルラントとの紛争で経済的に衰退しはじめているといった状態であった。この機に乗じて優れた貿易港を持つオランダはアムステルダムを中心に自由な海上を走り廻り、その結果商業活動は活発になり富みの蓄積が可能になったのである。そして多くの移民達から印刷技術、金属加工の技術、金融などを導入してオランダは商業大国として一層の発展を遂げるようになった。

第三の要因にはオランダでは身分に開きがなかったことが挙げられる。従来からオランダには大土地所有者が存在せず、貴族の勢力も弱体化しており、聖職者も強い権力を持っていなかった。従って独立直後の社会においても身分の開きはほとんどなかったのである。当時のオランダの上層階級は商人層で占められており、彼等即ち市民が政治的にも経済的にも優位に立っていた。これが市民文化誕生に大きく貢献することになった。

最後に市民風文化発達の理由として挙げられるのは、宗教の影響である。オランダではエラスムス(1466-1536)の思想に基づき旧教・新教・ユダヤ教・イスラム教など全ての宗派が受け入れられ、また聖職者の権力が大きくなかったことから、カルヴィニズムが迅速に浸透し、カルヴァン派の新教が事実上の国教となった。1550年代のカルヴァンの「禁欲的プロテスタンティズム」が熱烈な支持を受けたが、この思想によって貴族は市民的精神を持ち続けることができ、また、この思想は商業の一層の発展を促すことになったのである。

以上のような社会的背景から、17世紀初期のオランダでは従来の宮廷を中心にした貴族文化とは異なる、市民を中心とした「市民風の文化」が生まれ、それが各国に波及してオランダはヨーロッパの文化的中心地となったのである。

オランダ市民風文化

この「市民風の文化」とはどのようなものであったかを考えてみたい。まずこの文化の第一の特徴は市民生活の中の「日常性」を大切にしたということである。即ち17世紀のオランダ文化は他の文化のように、限られた場所で特定の人々によって作られ、限られた人々のみが享受したのではなく、市民の日常生活を基盤として誕生し、市民全員がこれを楽しむことができた文化であった。儉約と質素はオランダ国民の特性であり、人々は日常生活の中では身の回りに存在する物を常に美しく磨き上げて、その中に美を発見することに喜びを感じていたのである。経済的には裕福であっても新興の市民であった彼等は、特別な古典的知識を持たずに楽しむことが出来る文化を求めて、それを身の回りに発見したのである。

このことは先にも述べたように、オランダ絵画によく現われている。即ち、オランダにおいては絵画は日常生活の鏡といわれる程、そこに描かれた題材は極日常的なものであり、その表現は徹底したリアリズムで貫かれていた。17世紀のオランダでは風景画や静物画に人気が集まったという。人々は幻想的な要素を含まない、自然のままに表現された絵を好んだのである。(写真3)はレンブラントの「聖家族」で、題名から察するとマリアとイエスの母子を描いたものと思われるが、聖家族の姿を借りて当時の庶民の生活の一場面が実に忠実に描写されている。画面には大工道具、暖炉、鍋など日常の必需品に加えて、柱に掛けた大蒜の束まで日常的な事物が写實的に描かれている。画面の人物描写も窓からの光線を受けて大工仕事にそしむヨセフ、乳を与えるマリア、膝で眠るイエスやそれを覗き込む老人など、極日常的な庶民の生活の一瞬である。また(写真4・5)は時代的には少し遅れるがフェルメールの作品である。前屈みになって手元を見つめながら細かい手仕事に余念のない若い女性や、部屋の片隅で鍋に牛乳を注ぐ女中の描写である。いずれも庶民の日常生活の一瞬を捉えた日常性あふれる作品である。この種の絵画を高階秀爾氏は「市民絵画」と呼んでおられるが、これらの絵画をオランダ市民達は極日常的なこととして、自分達の部屋に飾って楽しんだのである。

このようにオランダ絵画は従来の美術の最大のパトロンであった宮廷や教会に代わって、市民階級に支えられて発展したのである。オランダ市民達が競って絵画を買い求めては自宅に飾る社会現象は、他の国ではみられないことで、特に家の街路に面した部屋を高価な作品で飾り、農家の一室、肉屋やパン屋の店先、鍛冶屋や靴直し



Photo 3. レンブラント
聖家族 1640 年
Rembrandt Holy Family



Photo 4. フェルメール
レースを編む女 1670 年
Jan Vermeer Woman
knitting crochet



Photo 5. フェルメール
牛乳を注ぐ女 1660 年
Jan Vermeer Maid serving
milk (Melkmeisje)

の作業場などにさえも絵を掛けて楽しんだという。

これらオランダの市民文化は当然、宮廷や貴族のサロンから生まれたものではなく、その発祥の場は「自警団」や「組合い」など生活の場であった。オランダでは独立以前から市民の生活を守るために各都市に「自警団」が結成されていた。(写真6)はレンブラントの「夜警」で、射撃隊の面々を描いた集団肖像画であるが、実際には既に軍事的役割を失って、外国からの賓客を歓迎する際以外は活躍の機会はなかった。このように17世紀に入ると自警団はその警備機能を失って社交クラブに変貌し、組合いと共にサロンの役割を果たすようになった(写真7)。ここでは貴族も門閥も、裕福な市民も一般市民も一堂に会して、文化を語り合い、論議に花を咲かせ、教養を磨くことに励んだのである。またここでは宗派を超越してあらゆる宗教の人々が共に語り合うことができたが、このことは、服装から身分を取り除くことになり、17世紀オランダにおいては、国民が等しく同じ衣服を着ることになったのである。



Photo 6. レンブラント 夜警 1642 年
Rembrandt Night Watch



Photo 7. ハルス 聖アドリアンヌ組合 1627 年
Hals Gild of St. Adrianne

オランダの服飾文化

この市民風文化の中の服飾文化について述べてみる。オランダ市民文化の第一の特徴とされる「日常性」は、言い換えると「着易さ」「軽快さ」として衣服に取り入れられた。これは貿易を中心とする商業活動が盛んであったオランダでは、必然的にゆったりした活動的な衣服を必要としたために考え出されたものである。そして当時ヨーロッパ各国が戦時下にあったため、この活動的な衣服はその着易さから軍服として広く着用されて、ヨーロッパ全域に広まっていた。

この17世紀オランダ市民風の衣服と、これに先立つ16世紀にスペインを中心として、ヨーロッパ各国で着られた宮廷衣服と比較してみる。

16世紀の宮廷男子服は(写真8)のように貴族の権威と威厳を象徴した、荘重華麗な大げさなものであった。これは上衣(ダブルット又はブルポアン)と脚衣(ホーズ又はシヨース)から成るもので、上衣にも脚衣にも詰め物を入れて膨らませ、さらに人工的切れ目(スラッシュ)を入れて装飾とした。上半身は袖や胸に入れた詰め物で膨れあがり、大きく膨らませたお腹は「鵝鳥」のような形になった。下半身も丸く大きく膨らんで、そこにスラッシュを入れると「南瓜」や「西瓜」のような形と言われた。この詰め物による拡大は徐々にエスカレートしてゆき、ついには実際の肩幅の2倍から3倍の大きさになったという。また襟元には幾段にも重なった襷襟(ラフ)を付けたが、大げさな襷襟で時には顎が埋まってしまう程であった。さらに肩には床まで届く程の大きな垂れ袖を付けたり、マントを羽織ったりした。

女子服は、(写真9)のようにルネサンスの様式美である「均衡の美」を表すために、下拵えとしてドレスの下に補助器具を付けて、人工的にシルエットを作り出した。即ち、上半身はコルセットを用いて出来るだけ小さく締め付け、下半身は、ベチコートを入れて拡大させて、いわゆる細胴太腰のシルエットを作り出したのである。これに襷襟と垂れ袖が付けられ、足には高さが30センチもある靴(チヨビン)を履いた。このため歩く時は召使いの肩につかまって歩かねばならず、また顎が埋まるほど大きな襷襟の為に食事は他人に食べさせてもらわねばならなかった。一説によると、当時の宮廷女性は一人では歩くことも、食事をすることも出来ず、自分の身体の中で自由に動かすことが出来たのは指の先だけだったという。

即ち、16世紀の宮廷服は、豪華、荘重、威厳を表現することを目的に、男子服も女子服も嵩張ったシルエットを求めて、「着易さ」からは程遠い、全く非活動的な衣服であった。

これに対してオランダ市民風衣服は、貴族の威厳や権威から脱却し実用性を重んじた活動的な衣服であった。先ず男子服は(写真10)のように、上衣も脚衣も詰め物が少なくなったり、なくなったりしたために身体に自



Photo 8. クルーエ シャルル9世像 1565年
Clouet Portrait of Charles IX



Photo 9. 作者不詳 エリザベス1世 1593年
Unknown Artist Elizabeth I



Photo 10. ヴァンダイク 狩り場のイギリス国王 1635年
Van Dyck King of England at hunting ground

然に添うようになり着易いものになっていった。大げさな襷襟は、肩に垂れる「垂れ襟」に変化して全体に軽快な活動的な衣服になった。これは先にも述べたように貿易を主とする商業活動で、船を乗り廻すオランダの商人達には、動作が束縛されないことが必要条件であったために考え出された衣服であった。この活動的な衣服は、ヨーロッパ各国で軍服に取り入れられて流行するようになる。

次に女子服については、世界貿易や戦争に直接には関わらなかった女性達は、1620年代までは旧態依然とした16世紀のルネサンス風衣服を着用していた。(写真11)を見ると、男子服が軽快な市民風衣服に変わっているのに対して、女子服がまだ16世紀のスペイン調の名残を残していることがよく分かる。しかし30年代に入る頃から女子服も軽快な衣服に変化してゆく。即ち16世紀の細胴太腰の人工的シルエットが姿を消して、全体に身体線の添った細身のシルエットに変化する(写真12)。当然身体線の自由を奪う補助器具は用いられなくなり、頸を覆うほどの大げさな襷襟は垂れ襟に変わり、袖の詰め物や垂れ袖もなくなって、一人で動くことができる活動的な衣服になった。しかし補助器具で締め付けて人工的にシルエットを作り出すことはなくなったものの、まだスカートの重ね着や大きな袖、ハイウエストのドレスは男子服ほど着易いものではなかった。



Photo 11. ルーベンス ルーベンス夫妻自画像
1610年
Rubens Self Portrait of Mr. and Mrs.
Rubens



Photo 12. 作者不詳 ソフィ・ド・ラ・ガルディの
肖像 1643年
Unknown Artist Portrait of Zophy de la
Gardi

絵画に見るオランダ服飾

17世紀初期のオランダ絵画はその写実性において、非常に優れたものであり、服飾文化も日常生活に根ざした市民文化の特色をよく取り入れたものであったことは、先に述べた通りである。そこでこれ等の服飾がどのように絵画に表現されているかをみると同時に、絵画を通して17世紀初期のオランダ風俗ともいうべきものを探求してみたい。

(写真13・14)は共にハルスの群像肖像画であるが、いずれも画面に描かれた人物の衣服は黒一色で統一されており、アクセントとして白いレースの大きな垂れ襟やカフスを付けた姿で描かれている。このように装飾も少なく、色彩的にも地味な服装は、清潔好きなオランダの市民風俗をよく表しているといえるだろう。



Photo 13. ハルス ハーレムの聖エリザベート病院
の理事達 1641 年
Hals St. Elizabeth Hospital's trustees of
Harlem



Photo 14. ハルス 養老院の女理事達 1664 年
Hals Women trustees of Nurssing home

上に挙げた例からも分かるように、オランダ絵画の人物の衣服は、黒が主体で一般に暗い地味な色が多いことが目に付く。特に群像肖像画は登場人物が全て黒い服装で描かれている場合が多い。このことからオランダ人が黒を特に好んだことが想像できるが、この理由については、先ずスペインの影響が挙げられる。威厳と荘重を求めた 16 世紀のスペイン宮廷では黒が特別な色として好まれた。これはフィリップ二世が暗い性格から黒を好んだとも、また打ち続く身内の不幸のために常に黒の喪服を着ていた為とも言われている。オランダは植民地時代にこれらの影響を受けたことも考えられるが、やはりこれはオランダ市民の質素・儉約を理想とした堅実な国民性によるというのが、黒の流行の最大の理由であろう。堅実な国民性は胸元をきっちり締めた着装にもうかがえる。男性も女性も上衣の襟元をきちんと上まで閉じた几帳面な着こなしである。これらの絵では人物は主に上半身の姿で描かれているので、脚衣は見えないが上衣は 16 世紀のような大げさな詰め物がなくなり、自然なシルエットになったことがよく分かる。

唯一の装飾部分である白い襷襟にはさまざまな形があったことがうかがえる。16 世紀に流行した大げさな襷襟は、17 世紀にはいと徐々に肩に垂れるやわらかいものに変化して行き、さまざまな形を生み出していった。特に（写真 2）ではその過渡期的の様子がよく分かる。ここに挙げた絵画に描かれている襟も、鋸歯状のレース襟、棕櫚の葉状のレースで縁取りした襟、襟幅の狭い襟、肩を覆うほど幅広の襟、糊付けの硬い襟や柔らかい襟など多様性を見せている。襟と並んで装飾の重要なポイントとなったのが白のカフスであった。これは男女共に袖口には必ずといっていいほど付けられており、その幅はさまざまで、中には取り外しができる幅広のものもあった。

もう一つ目に付くのが被り物である。男性も女性も登場人物は全て被り物を付けて描かれているが、これも 17 世紀の新しい風俗である。特に男性は屋内でも大きな黒い帽子を被った様子がうかがえるが、つばの幅や頭頂の高さには変化があった。女性の被り物は白で頭部にびったりした地味な物であるが、いずれも両耳が隠れるように被られた。この被り物はフランドル地方で今も民族衣裳として被られるコワフにつながるものと思われる。

上に挙げた絵画は、すべて市民生活の一場面を描いた群像絵画でその登場人物達は、いずれも 17 世紀初期の典型的なオランダ風俗、即ち簡素で活動的なことを第一の特徴としたオランダ衣服で装っている。

まとめ

以上、絵画に描かれたオランダ風俗を見てきたが、改めてオランダの市民風衣服と、16世紀のルネサンス風衣服の相違点を挙げてみると、オランダ市民服は先ず簡素で装飾性の少ない事、豪華さよりも実用性を重んじた事、技巧的であるよりも軽快な着易さを求めた事、そして硬直的なシルエットから柔軟なシルエットへと変化した事、更にこれらの特徴に加えて色彩が地味である事等が考えられる。これらの服飾の特徴は、全てオランダ市民の国民性を基盤とした市民文化の一端として生まれたものであった。

過去の文化の歴史をみても、文化は富みと権威を持つ社会の上層部から生まれるのが常である。服飾文化の歴史においても流行の源泉となったのは常に社会のトップクラスであり、ファッションリーダーと呼ばれる人々は多くの場合、宮廷貴族の中から誕生した。しかし17世紀初期のオランダ市民風文化はこの常識を破って、権威を持たない市民の中から生まれ、しかも国家が独立すると同時にヨーロッパの文化的中心地となり、その文化は急速に他の国々に影響を及ぼすほどに発展し、ファッションをもリードしたのである。このオランダ市民風の服飾の流行には特定のファッションリーダーは存在せず、それは市民生活の必要性に応じて自然に発生したものであった。そしてそれが逆に、他の国々の上層階級にも取り入れられて広く流行したのである。庶民の中から生まれた文化が支配階級に広まる現象は、日本の江戸時代にその例をみることができるが、歴史上非常に希なことであった。しかしオランダでは先にも述べたように、種々の要因が重なってこれが実現したのである。

しかしこのオランダ市民風服飾が、ヨーロッパの他の国々において着用されるようになると、やがて貴族達は当然自分達の身分表示を求めて、それらに装飾を加えたり、豪華な布地を用いたり、色彩も華やかなものにしたりと、本来の「市民風」からはかなりかけ離れたものに変化させてしまった。そして、17世紀後半のルイ十四世の治世期にはいると、それらはいわゆるバロック風の様式美へと発展してゆくことになる。

したがって17世紀の様式美は通常「バロック様式」と呼ばれて一括して考えられているが、初期のオランダ市民風の様式美はバロック様式の範疇に入るものではなく、全く性格の異なるものとして、はっきり区別して考えるべきであると思う。

参考文献

- 丹野郁, 西洋服飾発達史(近代編), 光生館, (1958).
ブーシェ, F. (石山彰訳) 西洋服装史, 文化出版局, (1973).
ホイジンガ, J. (栗原福也訳) レンブラントの世紀, 創文社, (1968).
野間惟道, 世界の国シリーズ スイス, オランダ, ベルギー, 国宝社, (1985).
世界名画の旅取材班, 世界名画の旅2, 朝日新聞社, (1985-87).
ピオトロスキー, B. (生田円・加藤九祚・青木正規訳) エルミタージュ美術館, 岩波書店, (1985).
吉川逸治編集, ルーブルとパリの美術(ルーブル美術館Ⅲ・Ⅳ), 小学館, (1985・86).
坂本満編集, バロックの光と影, (ルーブル美術館Ⅴ), 日本放送出版協会, (1986).
鈴木勤発行人, ベルギー・オランダ物語, (世界美術の旅 7), 世界文化社, (1988).
越智道雄訳, ヨーロッパ宮廷文化の時代, (メトロポリタン美術全集 6), 福武書店, (1987).
後藤茂樹編集, スペイン・ポルトガル, (原色世界の美術 Ⅴ), 小学館, (1968-72).
吉川逸治編, プラド美術館, (世界的美術館 第9巻), 講談社, (1965-69).
摩寿意善郎編, ウフィツィ美術館, (世界的美術館 第12巻), 講談社, (1965-69).
吉川逸治編, アムステルダム美術館, (世界的美術館 第18巻), 講談社, (1965-69).
ラファエロ・カウザ, (松井美智子訳), バロック, (世界の至宝 6), ぎょうせい, (1983).
レンブラント・巨匠とその周辺 京都国立美術館 1987・7 開催 カタログ (1986-87).
田中美貴, 「17世紀オランダの服飾についての考察—服飾における日常的世界—」, 服飾美学, 第12号, 服飾美学会, (1983).